

文学へ七

文学史 金子みすゞ

今回の学習のポイント

「金子みすゞ」について知ろう!

国語監修・執筆

初山 秀夫

金子みすゞ (かねこ・みすゞ)

明治三十六年(1903)〜昭和五年(1930年)。山口出身。本名、テル。童謡詩人。二十歳ごろからペンネーム「みすゞ」で詩を書き、雑誌に投稿を始める。西条八十から「若き童謡詩人の中の巨星」と称賛され、投稿詩人たちの憧れの星となり、二十六歳で自ら命を絶つまでに五百編余りの詩を書いた。

代表作は「大漁」「私と小鳥と鈴と」「こだまでしょうか」など。

* 「みすゞ」というペンネームは、「信濃の国」にかかる枕詞の「みすゞ刈る」という言葉が好きだからという理由でつけたと言われている。

ふるさと・仙崎

みすゞが生まれた山口県の仙崎(現・長門市仙崎)は、古くからの漁師町で、北前船の寄港地として交易も行われ、地域の文化・経済の中心地として栄えました。

また仙崎は、日本有数の捕鯨の基地でもあり、だれもがいのちをとる悲しみを感じていたからでしょうか、向岸寺というお寺やその隠居所であった清月庵というところには、鯨の位牌や墓が残されていますし、春の終わりには、今でも鯨法会^えあるいは鯨回向^{くじらえこう}と呼ばれる法要も営まれています。その習わしに感銘したみすゞは、「鯨法会」という作品も書いています。みすゞの小さいもの、弱いもの、目には見えないもの、いのちなきものにも寄り添う、優しいまなざしは、このふるさとの風土が生み育てたものともいわれています。みすゞの詩集の原点といわれるものです。

* * *

「大漁」という作品は、みすゞの童謡の代表作として、最もよく知られている作品です。『日本童謡集』は、すぐれた童謡詩を集めたものですが、「大漁」はちよっと変わっていました。自然に向かう気持ちをつたった童謡でも、みすゞは海や大漁のお祝いをしている人たちの姿のなかに、死んだ鰻の、家族たちの悲しみ

を見ていたのです。ふつうの人には見えないものが、みすゞにはよく見えたのだと思われず。

童謡運動

子どもたちに本物の「詩である童謡」を渡そうとして始まったものです。大正七年（1918）に『赤い鳥』が、大正八年に『金の船』が、大正九年に『童話』がそれぞれ創刊され、北原白秋、野口雨情、西条八十らが、それぞれの雑誌に新しい童謡を発表し、また童謡の投稿欄の撰者として、投稿詩人たちを育てていこうとしていました。童謡は、子どもにも読める言葉で書かれた新しい詩であり、真の芸術を目指していたようです。みすゞが下関に移ってきた大正十二年（1923・みすゞ二十歳）ごろは、日本の童謡は最も華やかな時代になっていました。みすゞも、本名のテルではなく、「金子みすゞ」のペンネームで、『童話』『婦人倶楽部』『婦人画報』『金の星』の各雑誌に投稿しました。

母として

複雑な家庭環境の中で大人になったみすゞは、大正十五年（1926）に家族のことを考えて結婚し、その年の十一月に女の子（ふさえ）を出産しました。しかし、昭和三年（1928）ごろには夫から詩作を禁じられるとともに、夫からうつされた病気も悪化していき、昭和五年に入ると、みすゞは離婚を決意するほどまでに追いつめられていきましたが、当時は、親権を父親が持つのが一般的でした。みすゞは三月十日に自ら二十六歳の短い生涯を閉じてしまいました。夫宛ての遺書には、「ふさえを心豊かに育てたい。だから母ミチにあずけてほしい」と書かれていました。

まとめ

みすゞは、ふだん私たちが目を向けないようなもの、目に見えないが確かに存在するものに目を向け、人間はどうあるべきかということを簡潔に表現しています。みすゞの詩は、百年近く前のものですが、普遍性があります。読んだ人は、人間のことだけを考えてしまっている自分に気づかされます。みすゞの詩は易しい言葉で書かれていて読みやすいので、簡単にみすゞの大きな心に触れることができます。ぜひ手に取って読んでみてください。

